

平成 28 年度双方向短期留学プログラム大連理工大学（派遣）報告書

理工学部 教養
准教授 汪 義翔

平成 28 年 9 月 5 日（月）から 9 月 12 日（月）の期間において、学生短期学留学プログラムとして、10 名の本学学部生とともに中国・大連理工大学を訪問した。

本学の協定校である大連理工大学の全面的な協力のもと、大連理工大学の教員による特別講義（中国語、歴史、科学技術）や研究室インターンシップや伝統文化体験（武術、切り絵）を通じて学び、現地の日系企業、アメリカ系企業、文化遺産・史跡などを見学した。また、多くの大連理工大学の学生ボランティアがシスタントとしてプログラムに参加し、生活、見学、学習などについて本学学生を全面的にサポートしてくれた。学生同士で様々なことについて意見交換し、相互理解を深めることで、お互いを尊重する意識が芽生えた。

初日、現地についてみると、大勢のボランティア学生や先生方から熱烈な歓迎を受け大変驚きました、今回の短期交流プログラムのため、大連理工大学の国際交流部署は、昨年 11 月、「さくらサイエンスプラン」による短期留学の受け入れで本学を訪問した引率の先生・材料科学学院副院長の蘇克治先生の協力によって、昨年来日した 10 名の学生を含めた総勢 40 名ほどの学生ボランティアを動員した。その学生たちが、かわるがわるプログラムのほとんどに付き添い、英語だけでなく日本語も上手で本校の学生に対してとても興味を持って接してくれた。また、献身的に、自分の時間を使うことを厭わず、優しく手助けしてくれたことは大変印象的である。一方、本校の学生たちは、英語や日本語を流暢に話す中国の学生の勤勉さを目の当たりにして、自分自身の英語学習への意欲向上や中国語への興味が促進されたようである。中国語の学習歴がある参加者はもちろんのこと、中国語を学んだことがない 5 名の学生たちも、初めての中国語の講義を通じて覚えた簡単な挨拶、日常会話に使う言葉を用いて、ボランティアの学生に積極的に話しかける姿が多く見られた。さらに、ボランティアの学生と WeChat の交換をして、中国語で返信したり、情報交換したりした学生もいた。

私は学生に手を貸すことは簡単であったが、彼ら自身の判断で、様々な場面・状況を経験し解決して欲しいと思い、学生たちの様子を一步下がって見ていた。しかし、そこは若い学生同士ということもあり、すぐに仲良くなり、日本の文化や中国のことなど、お互い楽しく会話を弾ませていた。学生同士の親睦を目的に開催された学生交流会において、学生同士がさらに交流を深め、夜遅くなっても盛り上がったままで、交流会の余興に、会場の外にあるウッドデッキで円を作って輝かしい星空の下で笑ったり、歌い語り合ったりして、今回の交流プログラムの山場を迎えた。このように、若い学生たちの間に刺激を受け合い、友情が育まれ、相互理解が進めることができたことを考えると、プログラムの実施責任者としては大変感銘を受けた。

一週間という短い間でも、共に行動することを通じてボランティアの学生と本学学生との間に良い関係を構築することができた。本校の参加者である山田志帆さんから、「日中関係は、政治の面から見るとまだまだ分かり合える関係になることは難しいと思うが、このプログラムに参加した私たちは同じ地球上の友達としてこれから手を組んでいく一歩になったと思う。」と語ったように、国際交流を通じて、学生たちは意識変化が生じて、国際感覚を高めることができたと感じている。今後、このような若者同士の交流を拡大し続け、日本と中国、この「近くて遠い隣人」という関係を少しでも改善に向かわせたいと強く願っている。

日程ごとにおける報告

第1日目（9月5日（月））

成田国際空港第2ターミナルより、大連周水子空港行きの日本航空・9時35分発のJL827便で出発した。成田集合時にはHISの担当者の方による同行があったため、チェックインまで問題なく円滑に進むことができた。およそ3時間のフライトで中国時間11時40分到大連空港に到着した。大連理工大学国際合作交流処のプログラム主幹である曲媛さんと10名のボランティア学生が迎えに来てくれたため、その後、大学が用意したバスでキャンパス内にある宿泊場所である「專家楼」までの移動、チェックイン手続きは、大変スムーズに進めることができた。16時から開講式とオリエンテーションが行われ、大連理工大学の国際合作交流処の徐博瀚副処長、材料科学工程学院の蘇克治副院长が大学を代表してご挨拶と歓迎の意を表してくださった後に、曲媛さんからプログラムの全体の説明があった。その中で、学生が一人一人自己紹介をする場面があったが、初日ということもあって、少々緊張気味だった。夕方、大連理工大学側が主催した歓迎パーティーに参加し、本場の美味しい中華料理を堪能しながら、教員と学生たちは終始和やかな雰囲気の中で親しく言葉を交わした。



大連空港到着



開講式・オリエンテーション



歓迎会

第2日目（9月6日（火））

午前 朝9時から、日本語学科の孟慶栄準教授による講義「大連市の歴史について」が行われた。大連ならびに中国東北部と日本との関係は、歴史、文化、産業の面で非常に濃密なものであるにもかかわらず、日中両国の若者（とりわけ日本の若者）には、その重要性和将来的な価値に対する意識が意外なほど希薄である。孟先生の授業は学生たちに大連と日本との歴史的なつながりを理解させた上、後日の大連市内や旅順にある日露戦争の史跡

見学のための予習にもなったため、学生の見学へのモチベーションを上げた効果があった。次に、ボランティアの学生と本学の学生を、3つのグループに分け、それぞれ興味のあるテーマで討論会を行うことで、大学のボランティアの学生と本学学生との距離感がぐっと縮まってきたと感じられた。

午後 孔祥茹先生による1回目の中国語の講義に続き、楊雨龍先生による中国伝統文化・武術(太極拳)の体験講義があり、太極拳の基本動作と姿勢を学んで、有意義な時間を過ごした。朝から講義や体験授業、討論会などで忙しく過ごしたが、学生たちは疲れた様子を見せず、どの時間帯でも興味深く取り組んでいた。



「大連市の歴史について」の講義



双方の学生による討論会



太極拳の体験講義

第3日目(9月7日(水))

午前 朝、教室へ向かう途中、新学期開始に当たったこの時期にいつも行われている新入生の軍事訓練の様子を間近で見ることができた。日本では見られない光景なので、本校の学生にとって大変貴重な体験である。日本語学科の唐曉煜先生による「中国文化と歴史」の講義を受けて、中国文化・歴史一般に関する基礎知識を学んだ。

午後 2回目の中国語の講義に続き、中国伝統文化体験・切り絵の体験講義を受けた。先生から切り絵の要領を教えて頂いた後、学生たちはそれぞれ自らデザインした切り絵の作品に挑戦した。完成した作品の発表では、これまでいろんな国の学生を教えたが、日本人学生が最も手先の器用さがよく、作品の完成度が高いという先生のお褒め言葉を頂いた。



中国語の講義にて会話練習



切り絵の体験講義



切り絵の作品を持って記念写真

第4日目(9月8日(木))

午前 中国で、ロボットやソフトウェアの研究開発が最も進んでいる大連理工大学のイノベーション創業学院実験室を見学した。ロボットや3Dプリンタの技術開発や院生によるソフトウェアの開発の現場を見ながら、様々な技術開発の状況について説明を受けた。中国

の最新の科学技術に触れることができ、皆、大満足の様子であった。その後の3回目の中国語の講義では、主にこれまでの2回の講義の総括を行ったが、「前2回の授業で学んだ日本語を学生交流会で使ってみて、実際に通じました」と、喜んで孔先生に報告する学生もいた。

午後 大連経済開発区にあるアメリカ企業・インテルを見学した。2000人以上の従業員を有するこの会社は、社内で使用言語がすべて英語であり、生産ライン以外で制服を着用する姿が見当たらず、リラックスしたムードが漂う環境だった。翌日見学する日系企業のYKK apとは雰囲気も全く違い、社風が著しい対照をなしていることに、学生たちは大変驚いた。



ロボット開発の研究室見学



3Dプリンタ開発の研究室見学



インテル社見学

第5日目（9月9日（金））

午前 大連経済開発区キャンパスにあるソフトウェア学院を見学した。立命館大学と共同で設立したこの学院では、専門知識を身に付けさせると同時に、日本語科目の履修が必須となっているため、学生たちは日本語レベルが高く、日本語で本学の学生とスムーズに交流ができた。

午後 日系企業のYKK ap(吉田建材大連企業)を見学した。2年半前に、大連理工大学と協定締結に向けて協議を行うために大連に訪れた際に、下見を兼ねて、一度この企業を訪問した。今回、久しぶりに再会できた生産部長の白井さんから、会社の経営実態や商品の製造工程、製造ラインなどについて、詳しく紹介して頂いた。大連に日本から4000社ほどの企業が進出しているなか、競争の激しい中国市場において、YKK apがいかにか「戦っている」のかという点に興味尽きず、質疑応答のため、予定時間をオーバーするほどだった。



ソフトウェア学院見学



同学院の学生との意見交換会



YKK ap 社見学

第6日目（9月10日（土））

午前 貸切バスにて大連市内見学。星海広場や濱海路、日本人街、旧大和ホテル、旧満鉄本社ビルなど、日本の植民地時代の建物や今なお残っている当時のままの街並みなどのスポ

ットを見学した。

午後 大連から旅順にバスでおよそ1時間かけ移動し、3か所の日露戦争史跡の見学を始めた。最初に行ったのは東鶏冠山に築かれた日露戦争時のロシア軍の防御要塞、東鶏冠北堡壘である。1900年から4年もかけて造られたトーチカ（コンクリート製の防御陣地のこと）は、生々しい弾痕が無数にある。次に、1904年ロシア軍と乃木希典將軍率いる日本軍が壮絶な争奪戦を繰り広げた203高地に登った。学生たちは日本近代史の講義を受けたときと同じように、真剣な顔でガイドの艾さんの説明を聞いた。「今も残る日露戦争の激戦の跡、第一次世界大戦以前にこれほどまでの惨状を作ったのかと思うと寒気がした。」と感想を述べる者がいた。最後に、日露戦争終結後、海軍大将の東郷平八郎と陸軍大将の乃木希典が、日本兵の慰霊のために建てた高さ66.8メートルの「白玉塔」と呼ばれている塔を見学した。



大連市内の星海広場見学



旅順東鶏冠北堡壘見学



旅順白玉塔見学

第7日目（9月11日（日））

午前 本学学生からの英語によるプレゼンテーション・実習成果発表を準備。

午後 プレゼンテーションが時間通りに始まった。多くの学生にとっては初めての英語の発表であったが、一か月前からすでに準備をしていたこともあり、学生たちは堂々として素晴らしい英語によるプレゼンテーションをしてくれた。ボランティアの学生からもそれぞれのプレゼンテーションに対して質問をもらうことができた。その後、本プログラムの修了式で本学学生とボランティアの学生に修了証が贈られた。国際合作交流処の徐博瀚副処長より、両校の交流発展に寄せる期待と学生への励ましのお言葉を頂いた。夕方、大学の食堂で送別会を兼ねた終了餃子パーティーが行われた。



学生のプレゼンテーション



プログラムの修了式



終了(手作り)餃子パーティー

第8日目（9月12日（月））

日本航空（JL）828 便（13:00 大連発＝16:55 成田着）

大学のバスで 11 時過ぎに大連空港に到着した。ボランティアの学生 7 名も同行していただき、双方の学生は名残惜しげに別れを告げた。チェックインもスムーズに進み、13 時大連発、成田国際空港行きの飛行機に搭乗することができ、全員無事帰国することができた。

今回のプログラムは、本学および大連理工大学から、経費の大半を援助して頂いたため、学生はわずかな費用負担で内容豊富な留学体験ができた。また、大連理工大学の教員、ボランティアの学生には、毎日長時間にわたり多くの協力をして頂いた。さらに、派遣準備にあたり、本学の学国際交流課の方々にも大変ご尽力を頂いた。本学からの支援と国際交流課の方々に感謝するとともに、大連理科大学の支援および教員、国際合作交流処事務員、ボランティア学生を含む関係者に心より感謝を申し上げる。

平成 28 年度 中国 大連理工大学
双方向短期留学プログラム（派遣） レポート

（※複数枚になっても可）

学籍番号 8213030

所 属 基礎工学部材料工学科

氏 名 国枝宏之

1. 派遣プログラムについての感想（現地で感じたこと、現地での経験等）

私が今回の留学プログラムを通して感じたことは、中国は予想していたよりも住みやすい国であると感じました。大連理工大学はキャンパスが広く、数々の校舎だけでなくレクリエーション施設も完備しており、大学生が勉強するための環境が整っていました。大連の町自体も、他の国々の都市よりは比較的綺麗で、なおかつ生活には困りそうにもない程栄えていました。食事もリーズナブルな価格で、味も美味しいと感じるものばかりでした。

また、学生やその他の現地の人と交流して感じたことは、とても友好的な人ばかりでした。大連が親日で有名な町だからなのかは分かりませんが、少なくとも差別的な言葉や態度などは全く経験しませんでした。現地の学生は快活でおおらかな人ばかりで、ためらいなく話しかけることができました。また、アニメや映画の影響からか日本に対して興味がある学生が非常に多く、日本の文化の話で盛り上がりました。向こうで世話をしてくださったボランティアの学生とは今も連絡を取っており、みんな口を揃えていつか日本に行ってみたいと言っていました。

このように、今回の短期留学を通して中国には非常に良い印象しかありませんでした。また将来外国に住むのであれば、北米や欧米諸国かなと思っていたのですが、中国もよいのではないかと思います。むしろ、言語の壁さえ乗り切れば学生にとっては一番住みやすい国だと感じました。

2. 今後、今回の経験をどのように生かしていきたいと思いますか

私は今回の経験を通して、中国に対して興味が持てました。美味しい食べ物や住みやすい環境など、中国のことについてより知りたいと思うようになりました。よって、ボランティアの学生がアニメや映画などの日本の若者文化に興味があったように、今後は自分も中国の文化について調べたいと思っています。近年はネットが普及しているため、中国の文化については調べようと思えばいくらでも調べることができます。また、このように興味を持つことで私が中国の方と交流がよりスムーズになるのではと思っています。

そして次に私自身だけではなく周囲の人にも今回の留学のことを伝えることで、少しでも中国に対するイメージや警戒などを解くことができるのでは、と考えています。私の友達には人種差別をするような愚かな友達はいませんが、メディアの情報からか、どうしても中国

本土に対しては衛生面や安全面で心配する声は挙がっています。そのようなイメージを私自身が今回の経験を話すことで、まずメディアからの情報を疑う気持ちを生むことができればよいと思っています。

3. その他

今回の留学プログラムに携わって下さった、大連理工大学の教職員の方々、株式会社エイチ・アイ・エス様、東京理科大学の国際支援課の方々、ボランティアの学生、汪先生には心の底から感謝申し上げます。私にとって大いに楽しむことができ、得るものも多かった留学になりました。

平成 28 年度 中国 大連理工大学
双方向短期留学プログラム（派遣） レポート

（※複数枚になっても可）

学籍番号 731089

所 属 理工学部 電気電子情報工学科

氏 名 佐々木寛太

1. 派遣プログラムについての感想（現地で感じたこと、現地での経験等）

国と個人は区別して考えなければならないという当たり前のことを改めて実感した。色々なところで言っているが、大連に行く前は中国という国に対してあまりいいイメージは持っていなかった。正確に言うと今もそうだ。中国という「国」に対してはあまりイメージを持っていない。中国で生活する上での習慣には日本人にとっては受け入れがたい部分があるし、政治に目を向けてみれば国際社会をまるで無視するような行動が目立つ。しかしそれはあくまで「国」に対する印象であってその国に住んでいる「人」に対してのものではない。実際に中国に行ってみて、確かに衛生面や習慣など、今までのイメージ通り受け入れられない部分もあった。だがそこに住む人たちはとても親切で優しく、本質的な部分は日本人とほとんど同じなのではないかとさえ思った。このように、本来「国」に対する印象と、そこに住む「人」に対する印象は異なっていることが多いものであるはずである。いままで私は愚かなことに、メディアが報道する政治的な問題などから、中国という「国」とその国に住む「人」たちの区別をせずに判断してきた。今回の研修でそれがどれだけ日中の交流を阻害してしまっているのかを実感した。

二つの大きな「国」として、政治レベルでの戦略的な互惠関係を築くことは確かに大切だ。しかし民間人である私たちはそのようなことを考える前に、お隣の国に住むご近所さんたちと実際にあって一緒に食事をし、お酒を飲み、お話をし、いい友人になる、これらをまず優先させるべきなのではないだろうか。国民全員が中国人の友達を作るとするのはもちろん不可能だ。しかしこのような友人関係が増えていけば個人レベルの関係がいつか経済的に重要な関係になり、経済的に重要な関係はいつか政治面にも強く、良い影響を及ぼすはず。将来この交流のことを思い出し、この交流が上で述べたような日中友好への軌跡の小さな一つのきっかけに確かになっていたと思える日が来たらいいな、と思っている。

2. 今後、今回の経験をどのように生かしていきたいと思いますか

まずは自分の今回の経験を周りの人間と共有し、自分が持っていたような中国人に対する間違ったイメージを払しょくすることが第一にすべきことで、今回の経験の一つの生かし方だと思っている。

また、今回の交流では多くの優秀な中国人の友人を持つことができた。今後この友人関係

を絶やさず、将来自分たちの仕事をする上で互いに協力できるような関係に持っていくことで、自分の周りの人間も巻き込んだ日中交流ができるようにしていきたいと思っている。

3. その他

まず、今回の交流を組んでくださった汪先生、国際交流課の八木澤さん、大連理工大学の職員の方々、先生方、特にボランティアで様々な面で支えてくださった学生の方々にはとても感謝しています。ありがとうございます。

今回の交流は初回ということもあり、全体で連携がうまくいっていない部分が少しありました。例えば、大連理工大学の先生方がこのプログラム全体でどのようなことが企画され、どのようなことがすでに実行されたのかを知らず、結果として既に紹介してくださったことを再び紹介していただくことになったりする場面。今後このプログラムをより良くし、長く続けていくためにプログラムにかかわる人全員でしっかりと情報が共有されるようになることが一つ重要なことかな、と感じました。

来年は11月ごろに大連の学生がサクラサイエンスで日本に来てくれるだろうという話を伺いました。今回受けたご恩にこたえるため、その折には是非自分たちにお手伝いをさせていただきたいと思っています。特に今回のメンバーの中には野田キャンパスに所属しているメンバーが5人おり、手伝えることは多いかと思いますので、是非よろしくお願いします。

平成 28 年度 中国 大連理工大学
双方向短期留学プログラム（派遣） レポート

（※複数枚になっても可）

学籍番号 641511

所属 理工学部 応用生物科学科

氏名 山下 日和子

1. 派遣プログラムについての感想（現地で感じたこと、現地での経験等）

まず驚いたのが、今回大連にて交流させて頂いた学生の方々が日本語を喋れた、という点についてだ。この短期留学に行く前に書いた課題論文にて、私は日中の文化の相互理解を目的として行くと書いた。私たち日本からの留学生の中には、中国語を履修したことのない人もいたし、履修していたとしても日常会話などは到底できないような人たちばかりであった（1 人の例外はいたが）。中国の文化についても詳しくは知らなかった。一方大連理工大学の方々は、日本語での日常会話は余裕でこなすし、日本の文化についても私たちが驚くほどに詳しく知っていた。お互いに理解しあうことを目的として行ったが、スタートの時点で完全に大連の学生の方々がより日本について理解してくれていたと言える。この時点で私はもっと中国文化、例えば伝統的な武術などから最近人気の俳優やミュージシャンなどについてもっと調べてくるべきであったと後悔していた。せめて中国語で自己紹介くらいはできるようにしてくるべきであった、と。自分たちが中国に大変興味を持っていて、深く理解したいと思っていることが伝わらないのではないかと考えていたのだ。しかしそんな心配は無用で、大連理工大学の方々は懇切丁寧に、あの建物はなんだ、この料理はなんだ、この漢字の意味はなんだ、最近流行りの曲はなんだ、と大変上手な日本語で教えてくれたのだ。私も負けじと中国と日本の違いを見つけると、すぐにそれを学生の方々に教えてあげた（これが中国語で教えられたらより良い交流になったのだろうが、私は中国語を単語程度しか喋れないので日本語での会話となってしまった）。

私の班は成果発表のプレゼンで日中の教育機関の比較を行ったので、以下に学校面で印象に残っていることを述べる。まず、聞いてはいたが大学内が大変広かった。敷地が広いので当然建物も大きい。初日はその広さにただただ驚くばかりであった。慣れてくると広すぎて、歩きでの移動が大変だなと感じるようになった。iPhone に入れてある 1 日にどれほど歩いたかをはかるアプリのグラフが、大連滞在中だけものすごく伸びていたのを見たときは笑いが込み上げてきた。

次に、軍事訓練である。恥ずかしながら、大連に行くまで私は学生が軍事訓練をするということを知らなかった。丁度入学の時期であったので、新入生が軍事訓練を行っている様子を間近で見ることができた。日本では絶対に見られない光景なので大変貴重な体験が出来たと思う。

次に、寮についてだ。大連理工大学には全国各地から学生が集まるため、全寮制となっていた。今回、その寮の中まで見学させてもらうことができた。大変プライベートな空間であるにも関わらず、快く部屋を見せてくれた学生の方々には感謝してもしきれない。寮は想像していたよりも狭かった。その上プライベートな空間は皆無であった。一人になりたい気分の時など、みんなどうしているのだろうと、少し心配になった。

最後に高校卒業後の進学先についてだ。大学生、就職は同じだが、浪人生の扱いが中国と日本では異なっていた。日本では高校から卒業してほとんどの人は予備校に入る。一方中国では、高校3年生をもう一度やるそうだ。私自身浪人生なので、この話は大変興味深かった。受験の苦しさは、日中でそう差は無いようであった。

このように、中国の大学については大連理工大学の方々が隅々まで教えてくれたので、たくさんの知識を身に付けることができた。大学のことのみならず、中国のことを様々なジャンルに渡って教えてくれた。すなわち中国を理解することに一歩近づいたといえる。この他にも体験したこと、教わったことはまだまだたくさんある。とてもじゃないが、全ては書ききれないのでこれまでとすることにする。

2. 今後、今回の経験をどのように生かしていきたいと思いますか

将来、人類がこの世界で生きていく上で、国どうしの交流は欠かせないものとなってくるだろう。現在の日中関係は残念ながら良好とは言えない。国民の大多数が、お互いにお互いの国を嫌っている状態である。しかし、日本には今回の私たち10人のような、いや、選考落ちした人も含めれば40人強の日本人が、中国に興味を持ち、歩み寄ろうとした。日本の大多数の人間が中国に悪印象を持っているにも関わらず、だ。一方中国にも、日本に歩み寄ろうとしてくれている若者がたくさんいた。私は大連で様々な学生になぜ日本語を勉強しようと思ったのかを訪ねた。その答えは「日本が好きだから。」「日本のアニメが好きだから、日本も好き。」「覚えてないけど軽い気持ちで始めたらどんどん好きになった。」などというものだった。自国と政治的関係が良好でなく、メディアでは悪いところばかりが取り上げられている、そんな国を「好き」と言ってくれたことに、日本人としてどれだけ感動したことか。思わず零れそうになった涙を慌てて隠した。

中国と友好的な関係を築こうとしている日本人の若者と、日本と友好的な関係を築こうとしている若者。今現在を変えるのは難しい。しかし、この先の社会を作っていく次世代の人々の意識を変えていくことは、今を変えるより、よっぽどやる価値はあるように思う。私は、今回の経験をたくさんの若者たちに伝えていきたい。まずは、身の回りの家族、友人、知人から、SNSなども積極的に利用して、また、将来子どもが生まれた際には、国際交流の大切さというものを必ず教え込みたい。私たちの次の世代にもこのことは伝えていくべきである。どれだけ時間がかかるかはわからない。しかし、日中の国民の大多数がお互いに好印象を抱く日が来るかもしれない。

3. その他

くだらないが印象に残っていることを書いていく。

- ・トイレにトイレットペーパーが無いことに大変驚いた。中国の女性は皆トイレ用の紙を常に持ち歩いているそう。入ってすぐ大きなトイレットペーパーが1つだけあり、そこでとってから個室に入るタイプのトイレもあった。

- ・犬が基本放し飼いされていたのが怖かった。

- ・車はクラクションを鳴らしすぎだと思った。道路は歩行者ではなく車優先。たまに道を譲ってくれる車が現れるとみんなして大変驚いていた。聞いてはいたが、想像以上に交通事情は酷かった。

- ・中国人は冷たいものを飲まない、食べないこと。元々知ってはいたが、まさかこれほどまでとは。ビールがぬるい。ご飯を食べながら飲むものは白湯(冷たいものを飲むと油が固まってしまうから、暖かいものを飲むのだそう)。アイスも人によっては全く食べない。ついでに寮には冷蔵庫が無いのだそう。そういえば、私たちの帰国後すぐに日本に留学しに来た大連の学生は、日本の飲み物は全てが冷えているのでお腹を壊しっぱなしだと言っていた。

- ・学食でもレストランでも、とにかく料理の種類と量が多い。中国人は食文化を大切にしているイメージがあったが、存分にそれを体感した。もったいない精神がはたらいて、毎食腹十分目、いや、十二分目まで食べてしまった。

- ・民族の種類が多いので、それぞれにあった食事が学食では用意されていた。中国北部出身の人は味の濃いものを好み、南部の人は薄いものを好むなど、同じ民族であっても出身地によって食の志向が違うこともしばしば。中国よりよっぽど小さい日本ですら関東と関西の味の違いがあるので、当たり前なことだと思った。

- ・結婚すると、共働きの場合、家事は男性がやることが多いのだそう。日本とは逆で驚いた。社会に出て料理の腕が必要になるのに寮では料理禁止らしく、男性は大変だなと感じた。

ここまで読んでくださりありがとうございました。長々と失礼いたしました（これでもまだ全然書き足りないのですが）。

平成 28 年度 中国 大連理工大学
双方向短期留学プログラム（派遣） レポート

（※複数枚になっても可）

学籍番号 4515109
所 属 工学部機械工学科
氏 名 山口京星

1. 派遣プログラムについての感想（現地で感じたこと、現地での経験等）

今の中国の人たちは日本のアニメが好きな人が多く、日本に来る人も増えていることから、日本に対して嫌悪感はテレビが伝えるほどではないが、少しはあると思っていた。しかし実際中国で何人?と観光地で聞かれたとき日本人と答えても変な顔をされることはなかった。また、旅順に残る日露戦争関係の記念碑などが観光地として今も残っている。私のイメージでは旧日本軍は中国人が一番嫌う存在であって、なぜ日本人だけでなく多くの中国人が訪れるのか良く理解できなかった。解説パネルは日本語や英語でも書かれていて、それを読む限り、日本語訳された中国の記事で目にするような旧日本軍に対する批判はほとんど見られなかった。むしろロシアを敵視するような部分があり驚いた。もちろん大連は親日的な地域であるからこそ、このようなものが残っているのは分かるが、中国の中で異質なものを見たような感じがした。

大連も他の都市と同じように建設ラッシュが進んでいて、街にはたくさん的高層マンションが立ち並んでいた。その数はとても多く大連全体で 100 棟を超え東京を超えているのではないかなと思わされるほどであった。なによりも驚かされたのがそのマンションの販売価格であった。一室当たりの値段は日本の都市の通常マンションほどであった。もちろん日本の物価であればさほど驚かないが、学校の近くのレストランで夕食が一人 1000 円もしないような物価の国でこの値段は異常であった。確かに東南アジアも高級マンションは 3,4 千万することはあるが、そのようなマンションが乱立していることには驚いた。乱立するマンションの一室一室に人が住んでいると考えると、その陰で何万人もの人が急速な物価の上昇に本当に苦しんでいると感じた。交流した大連理工大学の生徒から、彼らが中国で普通に就職しても日本の半分しかもらえないと言ったため、中国が稼ぐ多くのお金が一部の富裕層に流れていると思った。日本のメディアがよく中国の格差について報じていたが、中国は自分の中で社会主義のイメージが強かったため、にわかに信じがたかった。しかし、その現状を直接的にはないが見て、社会主義時代から続く”平等”という原則を全面に押し出しているのにも関わらず世界有数の格差大国になっている今の中国に幻滅してしまった。自分の中で社会主義国家だったからこそ、共産主義の理想である平等が今も守られていると少し期待していたのかも知れない。

2. 今後、今回の経験をどのように生かしていきたいと思いますか

大連理工大学の生徒と交流して一番印象的だったのは、彼らが中国は政治においては日本と敵対しているかもしれないが、彼らには彼らの意見があり、歴史や政治を客観的に見ることができると言っていたことだ。インターネットには情報統制の抜け穴が多く、海外の情報を彼らは得られるらしく、自分の意見を持つことをとても重要だと考えているようであった。彼らの多くは政治と個人を切り離して考えていた。だからこそ反日もデモが頻発した中国でも彼らは自分たちをよく思ってくれているのだと思った。彼らに日本人は中国人をどう感じているかと聞かれたとき、なんとと言えばよいか困ってしまった。日本の知識人を含めた多くの人が中国に対して親しさを感じていないのは事実であり、その原因は領土問題、外交、歴史など政治的なことに起因するものであるのは明らかである。政治と個人は関係ないと分かりつつ自分たちは切り離せずにいる。そのことは自分の周りにはいる人たちも同じである。情報が制限される中、切り離して考えられる彼らは自分たち日本人より上手だと感じた。今の政治が良い悪いは別として私は政治と自分を切り離して考えなければならないと中国に行って思った。切り離さない限り正しい情報とそうでないものの取捨はできず、何も考えず与えられたものを信じ込み、ますます心の溝が深まるだけである。切り離すことの重要性は大連に行く前から知っていたことではあったが、そのことを実感して初めて理解できた。これからは、このことを肝に銘じながら他国の人と交流していこうと思う。そうすればよりよく相手と親しくなれ、理解できるはずだと信じている。

平成 28 年度 中国 大連理工大学
双方向短期留学プログラム（派遣） レポート

（※複数枚になっても可）

学籍番号：1413101

所 属：理学部第一部数理情報科学科

氏 名：山田 志帆

1. 派遣プログラムについての感想（現地で感じたこと、現地での経験等）

初め日本を出発するまで、私は中国に対してあまり良い感情は持っていませんでした。しかし、このプログラムを通して中国人の優しさや心の広さを感じました。初日、現地についてみると、大勢のボランティア学生や先生方から熱烈的な歓迎を受け大変驚きました。プログラムのほとんどのに付き添っていただき、その学生たちも英語だけでなく日本語が上手で私たちに対してとても興味を持って接してくれました。英語のスピーキングがあまり得意でない私にとって、日本語での日中交流はありがたいものではありましたが、少し危機感を覚えました。現在の中国の給料は日本よりも低いにもかかわらず、大連理工大学の学生たちは私たち理科大生よりも大学で多くのことを学び、日々勉強に励んでいました。これは将来、日本が技術面や経済面において抜かされることは時間の問題です。市内観光では戦争時代や日本に占領されていた時代の跡地を巡り、当時の戦争の惨さを目の当たりにしました。汪先生の親族の話も興味深く、机上の勉強だけでは得られない歴史について触れることが出来ました。その他にも大学周辺の観光や学生寮の見学、歓迎パーティー、太極拳、切り絵や会社見学などは普段の旅行では得られない貴重な体験でした。日中関係は、政治の面から見るとまだまだ分かり合える関係になることは難しいと思いますが、このプログラムに参加した私たちは同じ地球上の友達としてこれから手を組んでいく一歩になったと思います。

2. 今後、今回の経験をどのように生かしていきたいと思いますか

理工大学の学生の勤勉さから自分の語学力をさらに磨かなければならないと感じました。まずは来年、就職した際に必ず必要になる英語、そして中国語は日本に來ている中国人留学生との交流の際に話すきっかけとして、習得に励みたいと思います。また今回の交流を通して、母国語で話しかけてくれることの喜びを実感しました。そうしたことから、これからは相手の言語を少しでも覚えてから交流に臨むことで相手への関心を示し、良い関係を築く努力をしていきたいです。その次に、「学ぶ姿勢」を強化していきます。会社訪問の際「学ぶ姿勢」は社会に求められていること、どの仕事においても求められている能力であることを再確認しました。目の前の課題や勉強に取り組むことは基本とはいえ、実行することは難しいものです。しかし、大連理工大学の学生たちはそれを実行し、さらに日本語の勉強もしていました。その学生の熱心さは私たち理科大生ももっと見習わなければならないことで

す。私は残り半年の学生期間を悔いのないように様々なことに興味をもって学んでいきます。これからの日本と中国を引っ張っていく立場として、これからも連絡を取り合っていき、中国や中国人について理解を深め、将来の有効な日中関係を築く一人になることを目指します。

3. その他

汪先生を始め、大連派遣プログラムの関係者や職員の皆様、大連理工大学のボランティア学生に心から感謝いたします。このプログラムを通して今一度、自分を振り返り、知見を広げる良い機会となりました。この企画が今回で終わらずに今後も継続されて、日中交流を通してお互いを理解する機会を持つ学生が増えることを願っています。本当にありがとうございました。

平成 28 年度 中国 大連理工大学
双方向短期留学プログラム（派遣） レポート

（※複数枚になっても可）

学籍番号 8615213
所 属 経営学部 経営学科
氏 名 星野祐貴

1. 派遣プログラムについての感想（現地で感じたこと、現地での経験等）

今回の派遣プログラムで得たものは多数ある。経済大国となった現在の中国でもまだ発展途上にある部分が残っていること。例えば町の清掃は進んでいない、トイレにはペーパー存在しないなど。しかしながらメディアが言うような横暴な中国人に出会ったかということそうではない。むしろ日本人よりも仁義の心を持ち合わせた心の温かい人ばかりであった。「おもてなし」というワードが少し前に流行したが、私は中国の方々の対応を前にして日本人が果たしてそのような言葉を売りにすることができるだろうかと感じてしまった。ボランティアだけではなく、レジの方や食堂の方も素敵な笑顔で我々に応対してくださった。外国人を疎遠に扱う日本人が彼らのようなホストができるかは私としては懐疑的である。我々が大丈夫、大丈夫と声をかけても心配してくださった。何度彼らの熱意に感動して目頭が熱くなったかわからない。その中で我々も自然とボランティアの彼らにもっと何かできないのだろうか、来年の交流プログラムで倍以上のお返しをしなければならないという声が出てきた。人間の心は人種や言葉が異なっても行動で動かすことができるのだと、真の友情は触れ合うことで可能だと強く感じた。ある夜、ウッドデッキで日本人と中国人およそ 40 人で円を作って輝かしい星空の下で笑い、歌い語り合ったことを忘れない。その光景があるボランティアと二人でアイスコヒーを飲みながら目から溢れるものを抑えていた。忘れえぬ美しい日々だったと自信をもって言える。

そして、旅順の観光は私にとってとても感銘を受けた出来事の一つだ。我が郷里の先輩、乃木希典將軍の魂を感じ郷里の石が石碑になっていることに誇りに思った。今も残る日露戦争の激戦の跡、第一次世界大戦以前にこれほどまでの惨状を作ったのかと思うと寒気がした。203 高地、旅順港を眺めた時に明治という時代を生きた人々の必死さはどのようなものであったのだろう、と考え込んでしまった。果たして我々は彼らのような熱意があるだろうか。登っていく坂の上にもし一朶の白い雲が輝いているとすれば、それのみを見つめて坂を登っていくだろう。一司馬遼太郎、坂の上の雲より間違いなく今回の研修は成功に終わったと思うし満足のいく結果になった。

今回、このような機会を与えてくださった汪教授、東京理科大学国際交流課そして何より大連理工大学の方々に感謝の意を表したい。

2. 今後、今回の経験をどのように生かしていきたいと思いますか

今回の研修に私のグローバルな経験を終始するつもりはない。私の研修に終わりはない。また新たな地域に赴き私自身の固定観念をいい意味で打破することができればと思う。

「普通～だろう」、「当たり前だろう」そんな言葉たちを多用している人々に目が行く。「普通」とはなんなのだろうか？多角的な視野を持たなければ、今日のグローバル社会において異文化の人種と共存することは不可能である。

郷に入っては郷にしたがえということわざが示しているように、我が国においては「普通」ではないこともその地域においては「普通」なのである。今日の日本人が必要なのは閉鎖的な心を捨て、多角的な視野を持って適応する能力である。私にはその力がまだまだ不十分である。その力を養うために積極的に今回のような研修はもちろん、学外での交流プログラムに参加していきたいと思う。

3. その他

平成 28 年度 中国 大連理工大学
双方向短期留学プログラム（派遣） レポート

（※複数枚になっても可）

学籍番号 6415009
所 属 理工学部応用生物科学科
氏 名 石川千遥

1. 派遣プログラムについての感想（現地で感じたこと、現地での経験等）

まずはじめに、このような素敵なプログラムに参加できた事にとても嬉しく思います。大連理工大学では、たくさんの現地の学生さんたちが朝から晩まで私たちに付いて下さり、宿舎から教室、スーパーマーケット、ショッピングモールやレストランなどに連れて行ってくれました。それぞれの授業があるのにも関わらず、時間がある時に私たちと交流してくれた方達に感謝します。また、先生方も企業の見学、中国文化の体験、現地の学生たちとの交流の場などを設けて下さったことにとても感謝します。現地のボランティアの学生は日本語強化クラスに所属していて、日本語の勉強にとっても熱心な様子で、辞書を携帯して、会話中にわからない単語が出てきたらすぐ辞書で調べている学生もいました。

教科書も見せていただいたのですが、非常に高レベルな教材を使っている印象でした。私たちも言語だけに限らず、すべての勉強において見習うべき姿勢であると思いました。また、今回のプログラムで 2 社の見学に行きました。そこで見たもの・聞いたものは私の大学生としての将来を考える上でとても意味のあるものになりました。働くことのイメージがより具体的になりました。そしてあのような一流と呼ばれる企業に就職するためにはどのような事が必要かを考える機会となりました。YPP ap の工場見学はとても興味深かったです。はじめて、間近で商品が作られるのを見る事ができ感激しました。YPP ap の日本人社員の方がおっしゃっていたのですが、可能なら海外で働くべきで、海外にくると考え方などが変わり、人生が変わるという事がとても印象に残りました。もう 1 つ見学した。

intel 社では詳しい作業現場である cleaning room などに入れなかったのですが、会社内にある施設などがたくさん見学する事ができました。やはり intel 社はアメリカ企業の特徴が非常に出ていたと思います。言語もすべて英語であり、リラックスしながらやるべき事はやり、時には楽しいイベントも行うというような環境でした。次の日に見学した日系企業の YPP ap とは雰囲気も全く違い、社風はこんなに違うものなのかと驚きました。また、旅順や大連市内を旅行に行きました。旅順と大連市内は両方とも日本と古くから関係があり、特に旅順の 203 高地は、歴史をあまり知らない私にとってとても勉強になりました。日露戦争の舞台となり、幾らかの間、日本軍が統治していたりたくさんの人々を犠牲にした事など、考えさせられる事が多くありました。この経験はもっと歴史について学びたいと思うきっかけとなりました。

一週間という今となってはとても短い期間でしたが、通常の生活では手に入らない貴重な経験をさせてもらいました。この一週間で得た知識、経験、大連理工大学の友達、東京理科大学の友達、先輩、後輩は一生の宝物になると思います。

2. 今後、今回の経験をどのように生かしていきたいと思いますか

今回の経験は非常に貴重なものです。まず、現地で得た完璧には会話が通じない国が違う人々とのコミュニケーションは少し難しいところがあります。しかし今回の経験を通じてどのように相手の表情をみて相手の考えている事・言いたい事を読み取るような技術を少しながら得られた気がします。なのでこれから海外の人と接する時に、言葉だけではなく、表情や雰囲気も読み取ってコミュニケーションを取ろうと思います。また、最近では「日中関係が危ない」という人やマスメディアもありますが、実際行くとそんな事は全くなく、国は関係なくあくまでも人対人の関係なので、先入観を取り除いで、政治的な事を一切考えず無条件で相手を受け入れる事をより痛感したのでこのことを忘れず、たくさんの人々と接していきたいと思います。それと同時に、今回の経験で得たことを周りの人々にも伝えて、日中の大学生から視野を広げて、社会を変えていければ理想だと思います。

3. その他

中国の食文化は少し心配していましたが、レストランも大学内の食堂も美味しかったので安心しました。また、旅行では味わえない現地の大学生の生活（食堂でのご飯、授業寮の見学）も経験できたのでとても幸せで充実した 1 週感だったと思います。このプログラムと一緒に参加してくれた理科大の学生、プログラムを決めてくださり、予定を調整してくださった先生方、1 週間ずっと面倒をみてくれた現地の学生にとっても感謝しています。ありがとうございました。

平成 28 年度 中国 大連理工大学
双方向短期留学プログラム（派遣） レポート
(※複数枚になっても可)

学籍番号 6414063

所 属 理工学部応用生物科学科

氏 名 利根川聡史

1. 派遣プログラムについての感想（現地で感じたこと、現地での経験等）

今回のプログラムは驚くことが多かった。まず、たくさんの大連理工大学の学生がボランティアとして参加してくれ、私たちの生活をサポートしてくれたこと。そしてその学生の多くが日本語を話すことができたこと。これが一番驚いた。大学で中国語を二年間履修したとはいえ、まだまだ会話ができるほどではなく、また英語も典型的な日本人らしく読み書きはある程度できるが、会話をするには程遠いレベルの英語であるため、参加前はとても不安であった。しかし、中国の学生がとても優しく、日本語で積極的に話しかけてくれ、すぐに不安は取り除かれた。さらに日本語でコミュニケーションがとれたため、一週間という短い期間ではあったが、多くの情報を交換することができた。中国から見た日本は国レベルではやはり良い印象を抱かないようであった。しかし個人レベルではとても友好的であった。一緒に参加した星野が大連理工大学の学生に日本についてどう思うか、アンケートをとっていたが、多くはポジティブな回答だった。日本語強化コースが存在する大学だからかもしれないが、そのような印象を持っていることを知れてよかったし、うれしく思った。このような関係が維持され、今の若い世代が国の指揮を執るような時代になれば日中関係も良くなるだろうと思うほどである。そううまくはいかないだろうが。

また、汪先生や汪先生から中国の現代史について学べたことの中に多くの驚きがあった。今まで汪先生の授業を受けてきたが、先生の家族の話や現代史について話を聞く機会はほとんどなかった。今回の交換留学でそのようなことを話せる時間が多く取れ、いろいろ聞くことができたのは今後の財産となると思う。

2. 今後、今回の経験をどのように生かしていきたいと思いますか

まずは周りの友達や家族に今回の経験を話すこと。帰ってきた自分に「おかえり」「どうだった？」の次かけられた言葉は「空気大丈夫だった？」であった。実際、自分も行く前はかなり心配していて、マスクも何枚か持って行った。しかし中国滞在中に視界が霞んだり、変なおいがしたり、マスクを使ったりすることは一度もなかった。日本のメディアに先入観を作られているな、と思った。

また、日本人に対して嫌悪感を持っていると感じたこともなかった。大連理工大学の徐先生や蘇先生は歓迎会や交流会を開いてくれ、学生は寮の見学などをさせてくれた。そういつ

た経験を話すことで周りの人の中国に対する見方が変わると思うし、中国に興味を持ってくれたらよりうれしい。そして自分としては、今回の交流を1つのきっかけとして捉え、今後も連絡を取り合ったり、また中国に行ったりしたいと思う。

3. その他

今回、交換留学の機会を与えてくださった東京理科大学国際交流課の方や、汪先生に本当に感謝している。大学の支援のおかげで金銭的負担がほとんどなく、また交換留学ということで中国の学生と多くの交流ができたことは絶対に今後の人生に活きると思う。来年、さくらサイエンスで中国の学生が日本に来るときには、今回してもらったように色々とサポートしたいと思う。それだけでなく、今後も日中関係友好化に向けてできることがあったら、積極的に取り組んでいきたい。本当に今回はありがとうございました。今後も多くの学生に向けて留学の機会を開いてくれることを願っています。

平成 28 年度 中国 大連理工大学
双方向短期留学プログラム（派遣） レポート

（※複数枚になっても可）

学籍番号 7515075
所 属 理工学部機械工学科
氏 名 塚本卓磨

1. 派遣プログラムについての感想（現地で感じたこと、現地での経験等）

(1) 先ず、私が現地の学生と交流して驚いたのは日本語がとても上手だったということです。日常会話を 2 年間程の学校の授業だけでできるようになっていて且つ英語も上手で所謂トリリンガルであるというのに 8 年間勉強した自分の英語は日常会話すらできない状態です。又、intel での研修ではすべて英語で説明され、私意外は皆よく理解しておりながら私はほとんど聞き取れず、結局友達に聞いて理解するという結果になり自分の情けなさを痛感したと同時に日本の外国語教育の見直しも必要ではないかと感じました。

(2) 次に、私は今までメディアを通してでしか中国という国を知らなかったので私の中国の人に対する勝手なイメージは決して良いものではありませんでした。故に現地に行く前は正直少し怖くて不安でした。しかし実際に交流するとそれはやはり私の勝手なイメージであったと分かりました。空港に着いた途端から温かくもてなしていただき、何も分からない我々を優しく誘導していただきました。私が出会った人がマイナーな方なのかもしれませんが、日本語強化クラスでない学生も、食堂のおばちゃんも、街で物を売っている人も、お店の店員さんも皆優しかったので皆が皆日本人が嫌いというわけではどうもないだろうと感じました。

(3) 3 つ目は現地の生活についてです。まず料理は日本では見たことがない中華料理で驚きました。日本で普段中華料理として我々が食しているのは日本人の舌に合った物なんだと分かりました。又、大学内の生活についてですが構内は非常に活気に溢れていました。全寮制で皆仲が良くて一体感がありました。夜は遅くまで学生同士でスポーツや行事に没頭し、朝もテニスやランニングをする人がたくさんいました。一般の人も構内におり店もにぎやかで全体的に楽しそうでした。大学というのは本来こうあるべきではないかと思い、理科大もいずれはこうなればいいなと思いました。

2. 今後、今回の経験をどのように生かしていきたいと思いますか

(1) 上で述べたように語彙力の乏しさを痛感しましたので、まず英語を能動的に勉強しようと思えるようになりました。交流は先ずしゃべれないと成立しないものですし今回は現

地の学生の日本語が上手でしたので特に不便もなく交流がスムーズに行えましたが毎回毎回相手側の日本語が上手なわけではないですし、むしろ今回がとてもレアなケースでしたので次回に向けて自ら英語で話しかけられるくらいの自信と英語力を身につけたいです。

(2)次は他国に対して勝手な偏見を持たないということです。今回私たちが実際に目にしたのはまさにその国でありました。メディアというのは一部分を切り取って報じるものでそれを私たちは一般化しがちであります。私たちはこれを一部分の一事件としてみなければなりません。しかし実際に目にしたことのないものはメディアを通じてでしか伝わってこないでその国(国に限らずあらゆるもの)の事を知る為には実際に現地に赴くことがいかに重要かを今回切に感じました。私は渡航する直前にメンバーの皆さんに「今回の研修が私の中国に対する見方が変わるきっかけになれば嬉しい」と話しましたがまさにその結果となりました。それと同時にもっと日本から出て世界を自分の目で見て現地の人とお話ししなければいけないと思いました。又、これらの事を自分だけのものにせず友人などにも共有してそのことを知らせなければなりませんから会話やSNSを通して広く共有し合いたいと思います。

3. その他

今回の研修を終えて私はとても良い刺激をたくさん受けました。今まで日本から出るのを怖がっていた私が逆にもっと海外に出ていろいろな国の人たちと出会ってお話がしてみたいと思えるようになり、個人的にとっても大きな一歩を踏み出した様な気がします。今回初めての海外で何も分からない自分を支えてくれ、有意義な時間を共にしたメンバーや汪先生、大連理工大学の学生ボランティアの方々、そして今回の研修を支えてくださったすべての方に深く感謝しています。

次回大連理工大学の学生が日本にいらした時には是非私たちでお手伝いしたいなと思っています。

平成 28 年度 中国 大連理工大学
双方向短期留学プログラム（派遣） レポート

（※複数枚になっても可）

学籍番号 2314041
所 属 理学部二部化学科
氏 名 加知真里亜

1. 派遣プログラムについての感想（現地で感じたこと、現地での経験等）

現地の大連理工大学の学生が日本語で会話できることを知った時、大変驚きました。交流した学生たちから、日本を好きになったきっかけとして、または今でも日本のアニメやドラマ、小説や音楽が好きだと聞けてとても嬉しかったです。私は中国に対してニュースで報道されているようなことしか知らなかったのも、もっと自発的に中国および外国に対して興味を持とうと思いました。

プログラムの中で、大連市内にある 2 社の企業を見学しました。訪問した企業のうち、Intel では主に食堂や娯楽スペースを見せてもらいました。社員さんからお話を聞く機会も設けられ、学生生活や人生観に対してアドバイスを頂くことができました。また、社内では英語で会話をするを知り、英語の大切さを改めて実感しました。

帰国の前日には、研修の成果発表として現地学生の前で、英語でプレゼンをしました。自分の大学で学んだプレゼン力を活かしながら海外で発表できてとても貴重な体験ができたように思います。

2. 今後、今回の経験をどのように生かしていきたいと思いますか

まず、今回の訪問を機に日中の友好に貢献したいと思います。プログラム体験前は私自身が中国に対して良いイメージを持っていなかったのですが、訪問中にお会いした中国の学生は全員優しく友好的であるという印象を受けました。今回の体験を 1 人でも多くの日本人に伝え、草の根レベルでの日中の友好感情の形成に貢献したいです。

次に、私自身に関して、今回の企業訪問及び社員の方との交流では、残りの学生生活について強く考えさせられました。将来海外で活躍することも視野に入れ、専門以外の語学や教養の学習にもこれまで以上に意欲的に取り組みたいと思いました。

最後に、今回のプログラムを通して、本当に多くの中国人学生と友達になることができました。私たちが学生同士であったからこそ、純粋な交流ができたのだと思います。共に笑った日々を、私は一生忘れません。国境を越えて築いた友情を、いつまでも大切にしたいと思います。

3. その他

大連で交流して下さった学生の皆さん、様々な体験授業の中でお会いした講師の方々、引率して下さった先生、国際交流課の方々、その他今回のプログラムに携わった全ての方々に心から感謝したいと思います。本当にありがとうございました。

今回私たちが経験した驚きや感動を、少しでも多くの理科大生に体感してもらいたいです。このような短期留学プログラムがこれからも行われることを願っています。